学会等発表実績

委託業務題目: 「大腸がん肝転移切除例に適した新規抗がん剤を用いた術後補助化学療法の研究」

1. 学会等における口頭・ポスター発表

	子云寺にのいる口頭・小人グー光衣				
西護衛展所名乗の承認組織字が所以に ・		発表者氏名	発表した場所(学会等名)	発表した時期	国内・外の 別
評価部単独を除くState 1V大阪協会の当特 (2014.4 国別人・一部 (1928) (1	予後予測因子になりえるか?ワーク	下 敬史、佐野 力、 伊藤 力、 大藤 立 大 安部 一成 一成 一成 一成 一成 一次 中 一成 一次 中原 一点	第114回日本外科学会定期学術集会	2014. 4	国内
財 カ・干田墓総・伊藤	肝転移単独を除くStage IV大腸癌の当科 における治療成績(口頭)	木村 賢哉、木下 敬史、小森 康司、川合 亮介、植村則久、伊藤 友一、三澤 一成、千田 嘉毅、安部 哲也、伊藤 誠二、佐野 力、	第114回日本外科学会定期学術集会	2014. 4	国内
新育化学療法の適応別にみた大腸癌肝転		野 力、干田嘉毅、伊藤 哲 力、十田嘉毅、伊藤 哲 人 小森 康司、伊藤 可 成 、 一 文 一 文 一 文 、 本村 質 則久、 川 次 郎 克 、 大澤 智 成、 倉 閣、 倉 閣、 倉 閣、 倉 閣、 倉 郡 奉 、 本 下 平 報 幸 、 本 下 平	第287回東海外科学会	2014. 5	国内
大腸癌肝転移に対する化学療法後肝切除 成本 不材 要 成、		野 力、千田 嘉毅、伊藤 誠二、小森 康司、安部 哲 也、三澤 一成、伊藤 友	第69回日本消化器外科学会総会	2014. 7	国内
大腸癌肝転移における化療後肝切除の安全性へ化学療法および体薬による1 C G 変化 (ポスター) 大腸癌肝転移に対する再肝切除例の治療		野 力、伊藤 誠二、小森康司、安部 哲也、三澤 一成、伊藤 友一、木村 賢哉、木下 敬史、植村則	第52回日本癌治療学会学術集会	2014. 8	国内
大腸癌肝転移に対する再肝切除例の治療 京会 哲也 三澤一成 第76回 日本臨床外科学会総会 2014.11 国 11 12 12 13 14 15 16 16 16 16 16 16 16	全性~化学療法および休薬によるICG	力、伊藤誠二、小森康司、 安倍哲也、三澤一成、伊藤 友一、木村賢哉、木下敬 史、植村則久、川合亮佑、 木下 平	第12回日本消化器外科学会大会	2014. 10	国内
新前化学療法の適応別にみた大腸癌肝転 認二、小森 康司、安部 哲也、三澤一成、伊藤 友一、木村 賢哉 位、三澤一成、伊藤 左一郎、小西 大 加藤 祐一郎、高橋 進一郎、小西 大 原籍 第26回日本肝胆膵外科学会学術 第4014.6 国际 中山 雄介、後藤田 直人加藤 祐一郎、高橋 進一郎、小西 大 原 第114回日本外科学会雑 2014.3 国际 京都 第114回日本外科学会雑 2014.3 国际 京都 第114回日本外科学会社 2014.7 国际 京都 第114回日本外科学会社 2014.7 国际 京都 第19回日本消化器外科学会社会 次 第69回日本消化器外科学会社会 次 第4 中語、第5 中 表 伊藤 雅昭 第69回日本,从 第69回日本,第69回日本,从 第69回日本,从 第	大腸癌肝転移に対する再肝切除例の治療 成績ワークショップ(ロ頭)	誠治、伊藤誠二、小森康 司、安倍哲也、三澤一成、 伊藤友一、木村賢哉、木下 敬史、植村則久、川合亮	第76回 日本臨床外科学会総会	2014. 11	国内
加藤 祐一郎、高橋 進一 加藤 祐一郎、小西 大 加藤 祐一郎、小西 大 東会 2014.6 国際		野 力、千田 嘉毅、伊藤 誠二、小森 康司、安部 哲 也、三澤 一成、伊藤 友	第69回日本消化器外科学会総会	2014. 7	国内
おける戦略		加藤 祐一郎, 高橋 進一	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2014. 6	国内
大腸癌研究会プロジェクト研究: 低位前 方切除術における一時的人工肛門造設に 操 康司、坂口 善久、坂本一博、斉田 芳久、池 秀之、滝口 伸浩、益子 博幸、伊藤 雅昭 第69回日本消化器外科学会総会 2014.7 国			京都 第114回日本外科学会雑	2014. 3	国内
前化学療法と術前照射療法の治療選択と 同	方切除術における一時的人工肛門造設に	森康司、坂口善久、坂本一博、斉田 芳久、池 秀之、滝口 伸浩、益子博	郡山 第69回日本消化器外科学会総会	2014. 7	国内
吻合術後の残存直腸に発生した側方リン 外回 ラー 庵山 神治・ 早田 横浜 - 弟09回日本天勝肛門病学会学術集 2014.9 国	前化学療法と術前照射療法の治療選択と			2014. 9	国内
	吻合術後の残存直腸に発生した側方リン			2014. 9	国内
下部直腸癌における外科治療のダイナミス金光幸秀、志田大、塚本俊 第114回日本外科学会 2014. 4 国	下部直腸癌における外科治療のダイナミス	金光幸秀、志田大、塚本俊	第114回日本外科学会	2014. 4	国内

金光幸秀、塚本俊輔、坂本原	第69回日本消化器外科学会総会	2014. 7	国内
金光幸秀,志田大、塚本俊輔,	第76回日本臨床外科学会総会	2014. 11	国内
Ishikawa T, Uetake H, Murotani K, Kobunai T, Ishiguro M, Matsui S, Sugihara K.	ヨーロッパ臨床腫瘍学会	2014. 11	国外
石黒めぐみ、中谷英仁、石 川敏昭、植竹宏之、杉原健 一.	第81回大腸癌研究会	201472	国内
植竹宏之	消化器外科学会	2014. 10	国内
金澤周、大島貴、塩澤学、 佐藤勉、山本直人、利野 靖、国崎主税、吉川貴己、 赤池信、今田敏夫、益田宗 孝	第100回日本消化器病学会	2014. 4	国内
沼田幸司、塩澤学、浅利昌 大、片山雄介、澤崎翔、五 代天偉、樋口晃生、森永聡 一郎、利野靖、益田宗孝、 赤池信	第22回日本消化器関連学会週間JDDW2014	2014. 10	国内
村田一平、塩澤学、浅利昌 大、片山雄介、沼田幸司、 澤崎翔、樋口晃生、五代天 偉、森永聡一郎、赤池信	第114回日本外科学会定期学術集会	2014. 4	国内
澤崎翔、塩澤学、樋口晃 生、浅利昌大、片山雄介、 沼田幸司、五代天偉、利野 靖、益田宗孝、赤池信	第52回日本癌治療学会学術集会	2014. 8	国内
樋口晃生、塩澤学、浅利昌 大、村川正明、片山雄介、 澤崎翔、青山徹、金澤周、 利野靖、益田宗孝、赤池信	第69回日本大腸肛門病学会総会	2014. 11	国内
工藤進英	日本消化器病学会総会 東京国際フォーラムGブロック6F「G602」	2014. 4	国内
工藤進英	DDW WEOシカゴHilton Hotel	2014. 5	国外
工藤進英	日本消化器内視鏡学会関東地方会シェーンバッハサボー1F 第1会場	2014. 6	国内
山川雄士、山口智弘、佐藤 納人、賀川弘康、富岡寛行, 塩見明生、金本秀行、坂東 悦郎、寺島雅典、上坂克彦、 絹笠祐介	第114回日本外科学会定期学術集会、京都市	2014. 4	国内
富岡寬行、稱笠祐介、塩見明生、山口智弘、賀川弘康、山川雄士、佐藤純人、伊江将史,前田哲生、佐藤和入野、河田が、古谷晃伸,仲井希、坂東悦郎、金本秀行、寺島雅典、上坂克彦	第114回日本外科学会定期学術集会、京都市	2014. 4	国内
Kagawa H, Kinugasa Y. Shìomì A, Yamaguchì T, Tomioka H	11thInternational Conference of the Asian C	2014.5	国外
	金光・大原体 では、大原体のでは、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体、大原体	Murotani K. Kobunai T. Ishi guro M. Matsui S. Sugihara K. コーロッパ臨床腫瘍学会 第100回日本消化器病学会 第100回日本消化器病学会 第100回日本消化器病学会 第100回日本消化器病学会 第10回日本消化器関連学会週間JDDW2014 第22回日本消化器関連学会週間JDDW2014 第22回日本消化器関連学会週間JDDW2014 第22回日本消化器関連学会週間JDDW2014 第22回日本消化器関連学会週間JDDW2014 第22回日本外科学会定期学術集会 第114回日本外科学会定期学術集会 第52回日本海市療学会総会 東京国際フォーラムのブロックの「「G602」 工藤進英 日本消化器病学会総会 東京国際フォーラムのブロックの「「G602」 コース・ コース・	金光辛秀、志田大、塚本俊輔、第76回日本臨床外科学会総会 2014.11 Ishikawa T, Ustake H, Murctani K, Kobunai I, Darius K,

	·		Y	
切除不能進行癌・再発癌による消化管閉塞 に対する緩和手術の検討、要望演題62	富岡寛行、賀川弘康,山口智弘、塩見明生、坂東悦郎、金木秀行、寺島雅典,上坂克彦、絹笠祐介	第69回日本消化器外科学会総会、郡山市	2014.7	国内
StageⅢ大陽癌における5-FU関連酵素等 の発現量と臨床病理学的因子の関連:B-C AST、口演92	石黒めぐみ, 的場周一郎, 絹笠祐介, 田中千弘, 神藤英二, 石田文生, 池秀之, 俗彰一, 畑泰司, 望月泉, 小澤平太, 堀江久永, 山口明夫, 中谷英仁, 杉原健一	第52回日本癌治療学会学術集会、横浜市	2014.8	国内
当院での直腸癌に対する左結腸動脈非温 存・温存腹腔鏡下D3リンパ節郭清の比較検 討、一般演題282	仲并希, 塩見明生, 佐藤純 人, 山川雄士, 賀川弘康, 富 岡寛行, 山口智弘, 寺島雅 典, 上坂克彦, 絹笠祐介	第27回日本内視鏡外科学会総会、盛岡市	2014.10	国内
resection for stage II/III colorectal	K Nakajima, M Inomata, T Akagi, T Etoh, H Katayama, M Ito, S Fujii, S Saito, F Konishi, Y Saida, H Hasegawa, T Yamaguchi, Y Fukunaga, K Sugihara, M Watanabe, S Yamamoto, Y Shimada, Y Moriva, S	ASCO 2014	2014. 5	国外
ISR 術後の直腸脱に対する手術療法(口頭)	山口高史 松末亮 直原駿平 中西宏貴 菊地志織 川口清 貴 佐治雅史 花田圭太 畑 啓昭 成田匡大 大谷哲之 猪飼伊和夫	第69回日本大腸肛門病学会学術集会	2014. 11	国内
局所進行直腸癌に対する術前化学療法の 短期治療成績(ロ頭)	松末亮 山口高史 直原駿平 菊地志織 中西宏貴 川口清 貴 佐治雅史 花田圭太 畑 啓昭 成田匡大 大谷哲之 猪飼伊和夫	第69回日本大腸肛門病学会学術集会	2014, 11	国内
大腸癌同時性腹膜播種症例に対する Grade分類	能浦真吾	京都(日本外科学会)	2014. 4	国内
大腸癌同時性腹膜播種症例における Mitomycin C (MMC) 腹腔内投与の意義ポ スター	能浦真吾	横浜(日本癌治療学会)	2014. 8	国内
Significance of the resection of ovarian metastasis from colorectal cancersポスター	能浦真吾	Barcelona, Spain (European Society of COLOPROCTOLOGY)	2014. 9	国外
Laparoscopic pelvic excenteration for locally advanced and recurrent rectal cancer	Miyake M, Ikeda M,Haraguchi N,Miyazaki M,Nakamori S,Hirao M,Miyamaoto A,Nishikawa K,Asaoka T,Yamamoto K Sekimoto M Haraguchi N, Murakami	34th Annual Meeting of KSELS and 2014 International Symposium	2014 April	国外
Laparoscopic resection of advanced rectal cancer invading to prostate,s eminal vesicle and corpus spongiosum	Haraguchi N, Murakami H,Miyake M,Maeda S,Yamamoto K,Hama N,Nishikawa K,Miyamoto A,Ikeda M,Hirao M Nakamori S.Sekimoto M	14th JCK CRC symposium	201 4 Sept	国外
StageIV大腸癌における予後因子の検討 (ポスター)	高倉有二、池田聡、漆原 貴、井出隆太,築山尚山。 今岡祐輝、真島宏聡,山下 正博、野間歌、大原正礼 大石幸一,小播俊度、 保宏、石本達郎、虞次康	第114日本外科学会定期学術集会	2014.4	国内
	弘,中原英樹,板本敏行		'	
resection for stage II/III	私,中原央街、板本歌行 Nakajima K, Inomata M, et al., Japan Clinical Oncology Group.	2014 ASCO Annual Meeting	2014.5	国外

2. 学会誌・雑誌等における論文掲載

掲載した論文(発表題目)	発表者氏名	発表した場所(学会誌・雑誌等名)	発表した時期	国内・外の別
Complications associated with postoperative adjuvant radiation	Komori K1, Kimura K, Kinoshita T, Sano T, Ito S, Abe T, Senda Y, Misawa K, Ito Y, Uemura N, Kawai R, Shimizu Y.	Int Surg	2014	国外

Long-Term Survival of a Patient with Sigmoid Colon Cancer Showing Multiple Liver Metastases Treated by Performing Partial Hepatectomy, Five Years after Achieving a Complete Response via Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy].	Osawa T, Sano T, Shimizu Y, Senda Y, Yamaura H, Inaba Y.	Gan To Kagaku Ryoho.	2014	国外
Immunonutrition before Extended Hepatectomy with Biliary Reconstruction for Hepatobiliary Malignancy	Monden K, Takahashi S, Kato Y, Gotohda N, KinoshitaT, Shibasaki H, Konishi M	Hepatogastroenterology	in press	国外
肝血管筋脂肪腫との鑑別を要した高度脂肪化を伴う単純結節周囲増殖型肝細胞癌の1例	本多正幸,加藤祐一郎、高 橋進一郎、後藤田直人、小 林達伺、小嶋基寛、佐原八 東、小西大	日本消化器外科学会雑誌 47(10) 588-595	2014 4月	国内
肝原発神経内分泌癌の 1 例	大目祐介. 加藤祐一郎、後藤田直人、高橋進一郎、小西大	日本臨床外科学会雑誌 75(11) 181-186	2014 11月	国内
直腸(各論) 特集 サルベージとコン バージョン - 集学的治療で外科治療に求 められるもの	塚田祐一郎、齋藤典男、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄 介、	日本臨床外科学会雑誌 26 (4) 441-446	2014年1月	国内
Randomised phase III trial of adjuvant chemotherapy with oral uracil and tegafur plus leucovorin versus intravenous fluorouracil and levofolinate in patients with stage III colorectal cancer who have undergone Japanese D2/D3 lymph node dissection: Final results of JCOGO205	Shimada Y, Hamaguchi T, Mizusawa J, Saito N, Kanemitsu Y, Takiguchi N, Ohue M, Kato T, Takii Y, Sato T, Tomita N, Yamaguchi S. Akaike M, Mishima H, Kubo Y, Nakamura K, Fukuda H, Moriya Y,	European Journal of Cancer 50 2231- 2240	2014年9月	国外
Long-term outcomes after intersphincteric resection for low-lying rectal cancer	Saito N, Ito M, Kobayashi A, Nishizawa Y, Kojima M. Nishizawa Y, Sugito M.	Ann Surg Oncol 21 3608-3615	2014年10月	国外
Randomised phase III trial of adjuvant chemotherapy with oral uracil and tegafur plus leucovorin versus intravenous fluorouracil and levofolinate in patients with stage III colorectal cancer who have undergone Japanese D2/D3 lymph node dissection: final results of JCOGO205.	Shimada Y, Hamaguchi T, Mizusawa J, Saito N, Kanemitsu Y, Takiguchi N, Ohue M, Kato T, Takii Y, Sato T, Tomita N, Yamaguchi S, Akaike M, Mishima H, Kubo Y, Nakamura K, Fukuda H, Moriya Y.	Eur J Cancer	2014	国外
高齢者大腸癌に対する化学療法	Takiguchi N, Soda H, Tonooka T, Denda T. [Chemotherapy for elderly patients with colorectal cancer].	Nihon Rinsho.	2014	国内
Long-term monitoring of serum p53 antibody after neoadjuvant chemotherapy and surgery for esophageal adenocarcinoma: report of a case.	Shimada H, Nagata M, Cho A, Takiguchi N, Kainuma O, Soda H, Ikeda A, Nabeya Y, Yajima S, Yamamoto H, Sugiyama T, Itami M.	Surg Today	2014	国外
Pagetoìd spreadを伴う肛門管癌を発症 したLi-Fraumeni syndromeの1例	升田 貴仁, 早田 浩明, 滝口 伸浩, 外岡 亨, 山本宏, 宮崎 勝	日臨外会誌	2014	国内
イマチニブの長期投与後に経肛門的切除 を施行した直腸GISTの1例	外岡 亨,滝口 钾浩,山本 东,鍋谷 圭宏,池田 篤,貝沼 修, 早田 施,池明, 篤,貝沼 修, 東西 · 柳橋 治明, 武 莱廷子, 傳田 忠 道, 永田 松去	癌と化学療法	2014	国内
最新の消化器癌術前術後化学療法 大腸癌	金光幸秀、志田大、塚本俊輔	消化器外	2014. 4	国内
腸癌切除可能肝転移に対する周術期化学 療法	金光幸秀、志田大、塚本俊輔	消化器外	2014. 6	国内
大腸癌肝転移に対する肝切除後の肝再発 に対する治療戦略	塚本俊輔、大城泰平、坂本 良平、田中征洋、落合大 樹、志田大、金光幸秀	消化器外	2014. 1	国内
Stage IV大腸癌根治的切除例の予後	金光幸秀, 志田大, 塚本俊 輔, 落合大樹	外科 77(1) 5-12	2015. 1	国内
A Multicenter Phase II Trial of mFOLFOX6 Plus Bevacizumab to Treat Liver-Only Metastases of Colorectal Cancer that are Unsuitable for Upfront Resection(TRICCO808).	Uetake H, Yasuno M, Ishiguro M, Kameoka S, Shimada Y, Takahashi K, Watanabe T, Muro K, Baba H, Yamamoto J, Mizunuma N, Tamagawa H, Mochizuki I, Kinugasa Y, Kikuchi T, Sugihara K.	Ann Surg Oncol	Published online:03 Decem	国外

	ya			
特集:大腸癌治療-課題克服のための新たなストラテジー 大陽癌肝転移症例の臨床的問題と治療の実際.	植竹宏之、石川敏昭、石黒 めぐみ.	消化器の臨床ヴァンメディカル	2014	国内
【大腸癌肝転移;Consensus&Controvers	植竹宏之、石川敏昭、石黒 めぐみ、杉原健一.	肝・胆・膵	2014	国内
【大腸癌化学療法の最前線】補助化学療法の適応と実践(解説/特集)、	植竹宏之、石川敏昭、石黒 めぐみ、杉原健一.	Mebio	2014	国内
KRAS野生型進行大腸癌に対する1st line 化学療法における抗VEGF抗体と抗EGFR抗 体の腫瘍径縮小に関する検討	村田一平、塩澤学、浅利昌大、片山雄介、沼田幸司、澤崎翔、樋口晃生、五代天偉、森永聡一郎、赤池信	横浜医学	2014. 6	国内
大腸癌同時性肝転移に対する一期的肝切 除の治療成績	沼田幸司、塩澤学、森永聡 一郎、利野靖、益田宗孝、 赤池信	日本臨床外科学会雑誌	2014. 8	国内
Stagell直腸癌における再発危険因子の検	澤崎翔、塩澤学、五代天 偉、片山雄介、沼田幸司、 樋口晃生、利野靖、益田宗 孝、赤池信	日本大腸肛門病学会雑誌	2014. 5	国内
大腸側方発育型腫瘍(LST) 一新たな時代 へ序説	工藤進英	INTESTINE, 18 (1)	2014. 1	国内
大腸におけるEndocytoscopy.	工藤進英 森悠一ほか	臨牀消化器内科29(2),125-126.	2014. 3	国内
大腸がん検診における内視鏡の役割	工藤進英 児玉健太ほか	日本消化器病学会雑誌. 111 (3) . 45-49.	2014. 3	国内
治療のための大腸腫瘍癌診断学オーバービュー	工藤進英、三澤将史、森悠一ほか	Modern Physician. 34 (5) 572-574. 2014	2014. 5	国内
Nerve supply to the internal anal sphincter differs from that to the distal rectum:an immunohistochemical study of cadavers	Kinugasa Yusuke, Arakawa Takashi, Murakami Gen, Fujimiya Mineko, Sugihara Kenichi	International journal of Colorectal disease, 2	2014/4	国外
特集 直腸癌局所再発に対する治療戦略 新たな展開 総論 直腸癌局所再発の治療 に必要な局所解剖	山口智弘, 絹笠祐介, 塩見明生, 富岡寛行, 賀川弘康. 山川雄士, 佐藤純人	臨床外科、69(10):1170-1174	2014/10	国内
特集 Conversion Therapy(Adjuvant Surgery)-Stage IV症例に対する治療の奏 功に伴う切除 1.各がん腫における Convercion therapyとNeoadjuvant therapy 1)大腸がんにおける「Conversion therapy」 は「Neoajuvant therapy後の切除」か?	賀川弘康, 山口智弘, 絹笠 祐介	臨床腫瘍プラクティス. 11(1):5-8	2015/1	国内
切除不能大腸癌肝転移に対する Conversion therapyの短期・長期成績	賀川弘康, 山口智弘, 水野隆史, 富岡寛行, 塩見明生, 上坂克彦, 絹笠祐介	大腸疾患 NOW2015. 147-152	2015	国内
直腸癌局所再発に対し抗癌剤と炭素 イオン線治療を併用した1例	能浦真吾	癌と化学療法	2014	国内
Neoadjuvant Capecitabine and oxaliplatin (XELOX) combined with bevacizumab for high-risk localized cancer.	nasegawa J, Nishimura J, Mizushima T, Miyake Y, Kim Min H, Takemoto H, Tamagawa H, Noura S, Fujii M, Fujie Y, Kato T, Miwa H, Takemasa I, Ikeda M, Yamamoto H, Sakimoto M, Nazu P, Doki	Cancer Chemotherapy and Pharmacology	2014 May	国外
Impact of stereotactic body radiotherapy on colorectal cancer with distant metastases	Hiraki M, Nishimura J, Ohtsuka M, Shiomi H, Uemura M, Haraguchi N, Hata T,Hayashi T, Takemasa I, Mizushima T, Isohashi F, Yoshioka Y, Ogawa K, Doki Y, MoriM, Yamamoto H	Oncolo Report	2014 Feb	国外

化学療法後に根治切除を行った腹膜播種 を伴う切除不能進行再発大腸癌症例の検 討	海田志力里、池田聡、山内 理海、今岡祐輝、真島宏 ト、中本将、高倉有大石寺 一、小橋俊彦、札場保宏、 石本達郎、真次康弘、中原 石本達郎、真貴、篠崎勝則、 大樹、漆原貴、篠崎勝則、 版本敏行	癌と化学療法41 (5) 595-600	2014	国内
An elevated preoperative serum carbohydrate antigen 19-9 level is a significant predictor for peritoneal dissemination and poor survival in colorectal cancer.	Takakura Y, Ikeda S, Imaoka Y, Urushihara T, Itamoto T	Colorectal Disease	2014	国外
Multicenter Phase II Study of FOLFOX6 for Previously Untreated Unresectable Metastatic Colorectal Cancer	Satoru Iwasa, Yasuhiro Shimada, Yoshitaka Inaba, Kiyomi Mera, Hisateru Yasui, Yutaka Ogata, Kenichi Sugihara, Tatsuhiro Arai, Kenji Katsumata, Satoshi Ikeda, Makoto Akaike, Takeshi Kato, Tetsuya Hamaguchi and Tomoyuki Kato	J Integr Oncol. 3(2):120-	2014	国外
Short-term surgical outcomes from a randomized controlled trial to evaluate laparoscopic and open D3 dissection for stage II/III colon cancer: Japan Clinical Oncology Group study JCOG 0404	Yamamoto S, Inomata M, et al., for the Japan Clinical Oncology Group Colorectal Cancer Study Group	Ann Surg. 260(1):23-30.	2014	国外
Surgical outcomes of laparoscopic versus open abdominoperineal resection for anorectal cancer: a comparative study.	Inomata M, Nakajima K, et al.	Surgery:Current Reseach. 4(3).	2014	国外
D3 resection for stage II/III colorectal cancer: Japan Clinical Oncology Group study JCOG 0404	Nakajima K, Inomata M, et al.	Jpn J Clin Oncol. 44(9):799-806.	2014	国外
A randomized controlled trial comparing laparoscopic surgery with open surgery in palliative resection of primary tumor in incurable Stage IV colorectal cancer: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG 1107 _(FNCORE trial)	Inomata M, Akagi T, et al.	Jpn J Clin Oncol. 44(11):1123-6.	2014	国外
Comparing incidence of enterocolitis after laparoscopic and open low anterior resection for stage II/III rectal cancer.	Inomata M, Kusano T, et al.	Asian J Endosc Surg. 7(3):214-21.	2014	国外

Ⅳ. 研究成果の刊行物・別冊



A Randomized Controlled Trial Comparing Laparoscopic Surgery with Open Surgery in Palliative Resection of Primary Tumor in Incurable Stage IV Colorectal Cancer: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG 1107 (ENCORE Trial)

Masafumi Inomata^{1,*}, Tomonori Akagi¹, Hiroshi Katayama², Aya Kimura², Junki Mizusawa², Tsuyoshi Etoh¹, Shigeki Yamaguchi³, Masaaki Ito⁴, Yusuke Kinugasa⁵, Yoshihisa Saida⁶, Hirotoshi Hasegawa⁷, Mitsuyoshi Ota⁸, Yukihide Kanemitsu⁹, Yasuhiro Shimada¹⁰ and Seigo Kitano¹ for the Colorectal Cancer Study Group (CCSG) of Japan Clinical Oncology Group

¹Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University Faculty of Medicine, Oita, ²JCOG Data Center/Operations Office, Center for Research Administration and Support, National Cancer Center, Tokyo, ³Department of Gastroenterological Surgery, Comprehensive Cancer Center, Saitama International Medical Center, Saitama Medical University, Saitama, ⁴National Cancer Center Hospital East, Chiba, ⁵Shizuoka Cancer Center, Shizuoka, ⁶Toho University School of Medicine Ohashi Hospital, Tokyo, ⁷Keio University Hospital, Tokyo, ⁸Department of Surgery, Gastroenterological Center, Yokohama City University, Kanagawa, ⁹Department of Colorectal Surgery Division, National Cancer Center Hospital, Tokyo, Japan

*For reprints and all correspondence: Masafumi Inomata, Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University Faculty of Medicine, 1-1 Idaigaoka, Hasama-machi, Oita 879-5593, Japan. E-mail: inomata@oita-u.ac.jp

Received February 23, 2014; accepted July 21, 2014

A randomized controlled trial was started in Japan to evaluate the non-inferiority of overall survival of laparoscopic surgery to open surgery for palliative resection of primary tumor in incurable Stage IV colorectal cancer. Symptomatic, Stage IV colorectal cancer patients with non-curable metastasis are pre-operatively randomized to either open or laparoscopic colorectal resection. Surgeons in 56 specialized institutions will recruit 450 patients. The primary endpoint is overall survival. Secondary endpoints are progression-free survival, the proportion of conversion from laparoscopic surgery to open surgery, the proportion of patients who fulfill the criteria of starting chemotherapy by 6 weeks after operation, intraoperative and post-operative complications, adverse events during chemotherapy and serious adverse events.

 $\it Key words: colorectal cancer-palliative resection-laparoscopic surgery-randomized controlled trial$

INTRODUCTION

Laparoscopic resection has become an accepted therapeutic option for patients with curable colorectal cancer following the publication of large randomized trials confirming the safety and efficacy of these procedures to open resection (1-3). These trials showed that laparoscopic resections were associated with faster recovery, decreased morbidity, decreased pain and shorter hospital stay while maintaining

similar cancer-related survival. Also the Japan Clinical Oncology Group (JCOG) has completed patient accrual of the Phase III study that confirmed short- and long-term clinical outcomes from a randomized controlled trial (RCT) to evaluate the laparoscopic (LAP) and open surgery (OP) for Stage II and III colon cancer: JCOG0404 (NCT00147134/UMIN-CTR: 000000105) (4). In ASCO 2012, safety and short-term clinical benefits of LAP for Stage II and III colon cancer were demonstrated (5).

© The Author 2014. Published by Oxford University Press. All rights reserved. For Permissions, please email: journals.permissions@oup.com

These findings cannot necessarily be extrapolated to Stage IV patients because surgery is sometimes difficult due to tumor volume, tumor invasion and lymph node (LN) enlargement and is at high risk for complication. In addition, there is no RCT of LAP which focuses on Stage IV patients. A large-scale observational study was reported from Japan, which suggested that the efficacy and safety of LAP was comparable with those of OP (6,7). Thus, we designed a study, which investigates whether LAP is suitable for symptomatic, incurable Stage IV colorectal cancer with respect to survival and post-operative morbidity. The Protocol Review Committee of JCOG approved the protocol in November 2012, and the study was activated in January 2013. This trial was registered at the UMIN Clinical Trials Registry as UMIN000009715 (http://www.umin.ac.jp/ctr/).

PROTOCOL DIGEST OF THE JCOG 1107

PURPOSE

To confirm the non-inferiority of laparoscopic primary tumor resection in terms of overall survival compared with open resection for symptomatic incurable colorectal cancer.

STUDY SETTING

A multi-institutional randomized Phase III trial.

RESOURCES

This study was supported by the National Cancer Center Research and Development Fund (23-A-16, 23-A-19, and 26-A-4), Grants-in-Aid for Cancer Research (24S-5 and 24S-6), and Health and Labour Sciences Research Grants for Clinical Cancer Research (H24-05) from the Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan.

ENDPOINTS

The primary endpoint is the overall survival which is measured from the date of randomization to the date of death from any cause, and it is censored at the last day when the patient is alive. Secondary endpoints are progression-free survival (PFS), the proportion of conversion from LAP to OP, the proportion of patients who fulfill the criteria of starting chemotherapy by 6 weeks after operation, intraoperative and post-operative complication, adverse events during chemotherapy and serious adverse events. PFS is measured from the date of randomization to the date of progression or death from any cause which is earlier, and it is censored at the last day when the patient is alive without any evidence of progression. When the skin incision is longer than 8 cm due to any cause, they are defined as conversion from LAP to OP. Operative complications and adverse events are recorded in accordance with Common Terminology Criteria for Adverse Events (CTCAE), version 4.0.

ELIGIBILITY CRITERIA

INCLUSION CRITERIA

For inclusion in this study, patients must fulfill the following requirements pre-operatively: (1) pathologically proven adenocarcinoma or adenosquamous carcinoma; (2) primary tumor located at the cecum, ascending, transverse, descending, sigmoid and rectosigmoid; (3) primary tumor with bowel stenosis (no obstruction: one or more factors of the following four are fulfilled; (i) impossibility of oral intake, (ii) no flatus, (iii) abdominal distension and (iv) abnormal intestinal gas in the abdominal X-ray image) and/or bleeding (Hb < 9.0 or blood transfusion within 4 weeks before registration). If an emergency operation is needed, the patient is ineligible; (4) having at least one to three incurable factors among the following four factors: (a) hepatic metastases with the predicted remnant functional parenchyma of <30%; (b) pulmonary metastases meeting any of the followings: (i) invasion suspected to the mediastinum, heart, large vessels, trachea, esophagus, vertebral body or tracheal bifurcation; (ii) predicted postoperative lung function (%FEV1.0) of <40%; (iii) requiring total pneumonectomy for removal of all metastatic tumors; (iv) malignant pleural effusion or pleural dissemination; (c) distant LN metastases with 10 mm or greater short axis which fulfill any of the followings by computed tomography (CT) scan: (i) LN enlargement located above the lower edge of renal vein; (ii) LN enlargement along the common hepatic artery or the hepatoduodenal ligament with hepatic metastases; (iii) mediastinal or hilar LN enlargement with pulmonary metastases; (d) peritoneal metastases meeting any of the followings: (i) multiple irregularities or strictures of the intestinal walls confirmed by imaging; (ii) peritoneal tumor above the transverse colon; (5) no apparent invasion to adjacent organs; (6) no ascites above the pelvic cavity; (7) neither bone metastases nor brain metastases; (8) no history of abdominal surgery except gynecologic surgery for benign tumor, appendectomy and cholecystectomy; (9) PS of 0, 1 or 2; (10) aged 20-74 years old; (11) no prior treatment of chemotherapy or radiation therapy against any other malignancies, including colorectal cancer; (12) adequate organ functions and (13) written informed consent.

EXCLUSION CRITERIA

(1) Synchronous or metachronous (within 5 years) malignancies other than carcinoma in situ or mucosal carcinoma; (2) active infectious disease requiring systemic therapy; (3) hepatitis B surface antigen positive; (4) body temperature $\geq 38^{\circ}$ C; (5) women during pregnancy, possible pregnancy or breastfeeding; (6) severe mental disease; (7) currently treated with systemic steroids; (8) interstitial pneumonia, pulmonary fibrosis or severe emphysema; (9) uncontrollable diabetes mellitus or routine administration of insulin; (10) uncontrolled hypertension, defined as a systolic pressure ≥ 150 and/or a diastolic pressure ≥ 100 mmHg; (11) New York Heart Association Class III/IV cardiac disease or congestive heart failure that

would take medication in order to prevent lethal ventricular arrhythmias; (12) gastrointestinal fistula, perforation or abscess within 6 months; (13) unstable angina pectoris, previous myocardial infarction or arterial thrombotic event within 6 months; (14) abdominal aortic aneurysm (\geq 5 cm), thoracic aortic aneurysm (\geq 6 cm) or aortic dissection; (15) congenital hemorrhagic diathesis, coagulation disorder or significant episodes of acute bleeding of Grade 3 or more according to CTCAE ver. 4.0 within the past 28 days and (16) episodes of hemoptysis within 28 days.

RANDOMIZATION

After confirmation of the inclusion/exclusion criteria by telephone, fax or web-based system to the JCOG Data Center, the patients are randomized by the minimization method with balancing the arm according to ECOG PS (0 vs. 1 vs. 2) and institution.

QUALITY CONTROL OF SURGERY

To control the quality of the operation, we limit the operator to accredited surgeons. All operations are done or directly supervised by surgeons who are certified by the Study Chair. In the OP arm, the experience of at least 30 cases of OP is needed to be certificated as an accredited surgeon. In the LAP arm, the experience of at least 30 cases of both open and laparoscopic surgeries and the board certification by the Japanese Society for Endoscopic Surgery are needed.

TREATMENT METHOD

SURGERY

In both the arms, palliative resection of the primary tumor is performed. Systematic LN dissection is not allowed and minimal LN dissection to ligate feeding arteries is performed. If severe invasion to the adjacent organ is found out, resection of the invaded region is not allowed. Only slight invasion to the mesentery, small intestine, omentum, ovary, bladder, uterus or abdominal wall is allowed to be resected. Minor surgeries for benign disease such as cholecystectomy, hernia operation, etc. are acceptable. In the LAP arm, pneumoperitoneal and intracorporeal approaches are used to explore the abdomen, mobilize the colon, identify critical structures and ligate the vascular pedicle. Mobilization of the colon and identification of critical structures are performed by the pneumoperitoneal approach only. Resection of the colon, ligation of the vascular pedicle and reconstruction are performed by the pneumoperitoneal approach or the intracorporeal approach via a small incision (≤8 cm). A hand-assisted LAP is permitted, but sliding window and moving window methods are not permitted.

CHEMOTHERAPY

In the all cases, post-operative chemotherapy (mFOLFOX6 plus bevacizumab, bevacizumab 5 mg/kg on Day 1,

L-leucovorin 200 mg/m² and oxaliplatin 85 mg/m² as a 2 h infusion on Day 1, 5-FU 400 mg/m² bolus on Day 1 followed by 2400 mg/m² over 46 h, repeated every 2 weeks) are administered between 29 and 56 days from the surgery. If patients fulfill any of the following criteria such as having a history of hypertensive crisis or hypertensive encephalopathy, having a history of surgery or serious trauma within 28 days, having a history of intervention including a needle biopsy or having a serious and unhealed wound, mFOLFOX6 without bevacizumab is administered.

FOLLOW-UP

All patients are followed up every 8 weeks after discharge from hospital until disease progression. Blood tests including tumor markers and enhanced chest/abdominal CT are carried out at each visit.

STUDY DESIGN AND STATISTICAL METHOD

This trial is designed to evaluate the non-inferiority of LAP to standard OP in terms of overall survival. Other endpoints, such as intraoperative and post-operative complications and the proportion of patients who fulfill the criteria of starting chemotherapy by 6 weeks after operation, are set to evaluate less invasiveness of LAP. If the non-inferiority of LAP is confirmed with statistical significance in terms of overall survival and the superiority of LAP in terms of the other endpoints as shown above, LAP will be the preferred treatment. This trial was designed to achieve at least 70% power to confirm the non-inferiority of LAP with a non-inferiority margin of 1.25 in terms of hazard ratio, and this corresponds to 4 months to the median survival time of 20 months in the both arms and a one-sided alpha of 0.05. The planed sample size was 450 patients by Schoenfeld and Richter's methods (8) with 3 years accrual and 4-year follow-up.

INTERIM ANALYSIS AND MONITORING

Interim analysis is planned to take place twice, taking multiplicity into account by the Lan—DeMets method with O'Brien and Fleming type boundaries. The JCOG Data and Safety Monitoring Committee (DSMC) will independently review the interim analysis report and consider stopping the trial early. In-house interim monitoring will be performed by the Data Center to ensure data submission, data quality and study progress. The monitoring reports will be submitted to and reviewed by the CCSG every 6 months.

PARTICIPATING INSTITUTIONS (FROM NORTH TO SOUTH)

Sapporo-Kosei General Hospital, Iwate Medical University, Miyagi Cancer Center, Yamagata Prefectural Central Hospital, Tochigi Cancer Center, Gunma Prefectural Cancer Center, National Defense Medical College, Saitama Cancer Center, Saitama Medical Center, Jichi Medical School, Saitama Medical University International Medical Center, National Cancer Center Hospital East, Chiba Cancer Center, Juntendo University Urayasu Hospital, National Cancer Center Hospital, Kyorin University School of Medicine, Tokyo Metropolitan Cancer and Infectious diseases Center Komagome Hospital, Keio University Hospital, Tokyo Medical and Dental University Hospital, Toho University School of Medicine Ohashi Hospital, Kitasato University East Hospital, Kanagawa Cancer Center, Kitasato University School of Medicine, Showa University Northern Yokohama Hospital, Yokohama City University Medical Center, Saiseikai Yokohamashi Nanbu Hospital, Niigata Cancer Center Hospital, Nagaoka Chuo General Hospital, Ishikawa Prefectural Central Hospital, Nagano Municipal Hospital, Gifu University School of Medicine, Shizuoka Cancer Center, Aichi Cancer Center Hospital, Fujita Health University, National Hospital Organization Kyoto Medical Center, Osaka University Faculty of Medicine, Osaka Medical Center for Cancer and Cardiovascular Diseases, Osaka National Hospital, Osaka General Medical Center, Osaka City General Hospital, Osaka Medical College, Minoh City Hospital, Suita Municipal Hospital, Kansai Rosai Hospital, Hyogo College Of Medicine, Sano Hospital, Shimane University Faculty of Medicine, Okayama Saiseikai General Hospital, Hiroshima Prefectural Hospital, Hiroshima City Asa Hospital, Hiroshima City Hospital, Fukuyama City Hospital, National Hospital Organization Shikoku Cancer Center, Kochi Health Sciences Center, Kurume University School of Medicine, Kumamoto University School of Medicine and Oita University Hospitals.

Conflict of interest statement

None declared.

References

- Clinical Outcomes of Surgical Therapy Study Group. A comparison of laparoscopically assisted and open colectomy for colon cancer. N Engl J Med 2004;350:2050-9.
- Jayne DG, Guillou PJ, Thorpe H, Quirke P, Copeland J, Smith AM. Randomized trial of laparoscopic-assisted resection of colorectal carcinoma: 3-year results of the UK MRC CLASICC Trial Group. J Clin Oncol 2007:25:3061-8.
- Colon Cancer Laparoscopic or Open Resection Study GroupBuunen M, Veldkamp R, Hop WC, Kuhry E, Jeekel J. Survival after laparoscopic surgery versus open surgery for colon cancer: long-term outcome of a randomised clinical trial. *Lancet Oncol* 2009;10:44-52.
- Kitano S, Inomata M, Sato A, Yoshimura K, Moriya Y., Japan Clinical Oncology Group Study. Randomized controlled trial to evaluate laparoscopic surgery for colorectal cancer: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG 0404. *Jpn J Clin Oncol* 2005;35:475

 –7.
- Nishizawa Y, Saito N, Inomata M, et al. Short-term clinical outcomes from a randomized controlled trial to evaluate laparoscopic and open surgery for stage II, III colorectal cancer (CRC): Japan Clinical Oncology Group study JCOG0404 (NCT00147134/ UMIN-CTR: 000000105). J Clin Oncol 30 2012;(Suppl; abstr 3569).
- Hida K, Hasegawa S, Kinjo Y, et al. Open versus laparoscopic resection of primary tumor for incurable stage IV colorectal cancer: a large multicenter consecutive patients cohort study. *Ann Surg* 2012;255:929–34.
- Akagi T, Inomata M, Kitano S, et al. Multicenter study of short- and long-term outcomes of laparoscopic palliative resection of incurable, symptomatic stage IV colorectal cancer in Japan. J Gastrointest Surg 2013:17:776-83.
- Schoenfeld DA, Richter JR. Nomograms for calculating the number of patients needed for a clinical trial with survival as an endpoint. *Biometrics* 1982;38:163-70.

ORIGINAL ARTICLE

Comparing incidence of enterocolitis after laparoscopic and open low anterior resection for stage II/III rectal cancer

Masafumi Inomata,¹ Toru Kusano,¹ Tsuyoshi Etoh,¹ Tomonori Akagi,¹ Tomotaka Shibata,¹ Yoshitake Ueda,² Manabu Tojigamori,¹ Hidefumi Shiroshita,¹ Tsuyoshi Noguchi,² Norio Shiraishi² & Seigo Kitano³

- 1 Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University Faculty of Medicine, Oita, Japan
- 2 Center for Community Medicine, Oita University Faculty of Medicine, Oita, Japan
- 3 Oita University, Oita, Japan

Keywords

Enterocolitis; laparoscopic surgery; rectal cancer

Correspondence

Masafumi Inomata, Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University Faculty of Medicine, 1-1 Hasama-machi, Yufu, Oita 879-5593, Japan. Tel: +81 97 586 5843 Fax: +81 97 549 6039

Received: 28 November 2013; revised 4 February 2014; accepted 2 March 2014

DOI:10:1111/ases.12100

Email: inomata@oita-u.ac.jp

Abstract

Introduction: We recently observed an increased incidence of severe enterocolitis following laparoscopic low anterior resection (LAR) in some patients with stage II/III rectal cancer. This study aimed to examine the influence of laparoscopic LAR on postoperative enterocolitis compared with open LAR for Stage II/III rectal cancer.

Methods: From April 2002 to March 2012, we evaluated 65 patients with stage II/III cancer of the upper or lower rectum who underwent LAR. Among these, 27 patients underwent open LAR and 38 underwent laparoscopic LAR. First, we compared short-term outcomes between the two groups. Next, we evaluated the incidence of postoperative enterocolitis in the laparoscopic LAR group. The clinicopathological factors were examined by univariate and odds ratio (OR) analysis.

Results: Univariate analysis revealed significant differences in the occupancy rate, tumor location, depth of tumor invasion, operative time, amount of intraoperative blood loss, and postoperative enterocolitis between the laparoscopic and open groups. Postoperative enterocolitis developed in 6 of 38 patients (15.8%) in the laparoscopic group and in no patient in the open group. The occurrence of postoperative enterocolitis was significantly associated with BMI (\geq 28 kg/m²), operative time, and wound infection in the laparoscopic LAR group (OR: 0.11, 95% confidence interval: 0.044–0.280, P < 0.05; OR: 1.40, 95% confidence interval: 1.068–1.835, P < 0.05; and OR: 15.0, 95% confidence interval, 1.752–128.310, P < 0.05, respectively).

Conclusion: Postoperative enterocolitis occurred more frequently after laparoscopic LAR than after open LAR in patients with stage II/III rectal cancer. Clinical management in the perioperative period of laparoscopic LAR is necessary to prevent postoperative enterocolitis in obese patients and those with a prolonged operative time.

Introduction

The use of laparoscopic surgery for colorectal cancer has become widespread because of its minimal invasiveness. According to the 11th Nationwide Survey of Endoscopic Surgery performed by the Japan Society for Endoscopic Şurgery, 16 417 patients with colorectal cancer underwent laparoscopic surgery in 2011 (1). Laparoscopic

surgery for colon cancer is recognized as a standard therapeutic modality, and the indications of this procedure for rectal cancer have been gradually expanded.

Some studies have reported no significant differences in short-term and long-term outcomes between laparoscopic and open surgery for colon cancer (2–5). With regard to rectal cancer, some studies have reported that the complication rate after laparoscopic surgery is similar

Asian J Endosc Surg 7 (2014) 214-221

214

to that after open surgery and that there is no compromise in oncological outcomes with the former (6–8). However, the complication rate with laparoscopic surgery is reportedly higher for rectal cancer than for colon cancer (9). According to a report by McKay et al., the anastomotic leakage rate after laparoscopic surgery for rectal and colon cancer was 5.1% and 1.2%, respectively, while the intra-abdominal abscess rate was 6.4% and 0.9%, respectively (9). Additionally, Yamamoto et al. also reported that the anastomotic leakage rate in patients with stage 0/I rectal cancer who underwent laparoscopic anterior resection was 8.3% (10).

We recently observed the development of severe enterocolitis in some patients who underwent laparoscopic low anterior resection (LAR) for stage II/III rectal cancer. However, the frequency of postoperative enterocolitis is not mentioned in the 11th Nationwide Survey of Endoscopic Surgery performed by the Japanese Society for Endoscopic Surgery, In addition, no reports on severe enterocolitis in patients who have undergone laparoscopic LAR for rectal cancer are available. We reported the development of transient liver dysfunction in patients who underwent laparoscopic gastrectomy under CO2 pneumoperitoneum, and three patients who underwent laparoscopic gastrectomy among a cohort of 27 patients with liver disease suffered severe enteritis (11). It has been hypothesized that mesenteric hypoxia and related gut ischemia-reperfusion injury, which occur during and after pneumoperitoneum, pose a significant clinical problem (12). However, only a few clinical reports of oxidative stress from laparoscopic surgery exist (11,13).

In this study, we examined the rate of postoperative ischemia-related complications, including enterocolitis after laparoscopic LAR, and compared it with the rate after open LAR in patients with stage II/III rectal cancer. In addition, we examined whether laparoscopic LAR influences the development of postoperative enterocolitis in patients with stage II/III rectal cancer.

Materials and Methods

From April 2002 to March 2012, 252 patients with rectal cancer underwent initial surgery at the Department of Gastroenterological and Pediatric Surgery, Oita University Faculty of Medicine (Oita, Japan). We excluded patients with distant metastasis and those who underwent abdominoperineal resection because of the absence of anastomosis. In Japan, D3 lymphadenectomy is defined as the dissection of the inferior mesenteric artery lymph nodes and lateral pelvic lymph nodes. We also excluded patients with preoperatively diagnosed lateral pelvic lymph node enlargement because they required

lateral pelvic lymph node dissection. Therefore, we selected 65 patients with stage II/III cancer of the upper or lower rectum who required LAR with total mesorectal excision or tumor-specific mesorectal excision with inferior mesenteric artery lymph node dissection. Cancer stage was assessed according to the seventh edition of the UICG-TNM Classification of Malignant Tumors.

In our institution, we have been performing laparoscopic LAR for advanced rectal cancer since 2007. Therefore, in this study, open LAR was performed for advanced rectal cancer from 2002 to 2006. For advanced rectal cancer with invasion to other organs (T4b), we have performed open LAR since 2007. During the procedure, pneumoperitoneum was induced and maintained under 10-mmHg CO₂. The left colic artery was preserved during both laparoscopic and open LAR. Anastomosis was achieved by the double stapling technique or hand-sewn when the patient required super-LAR. We also introduced a clinical pathway during surgery for colorectal cancer at our institution: protocol, patients were preoperatively prepared according to the Guideline for Prevention of Surgical Site Infection, 1999 (14). All patients were asked to take polyethylene glycol, neomycin, and erythromycin on the day before surgery. Cefmetazole, an antibiotic, was administered on the day of surgery.

In this study, six patients were treated by preoperative chemoradiotherapy (CRT). Preoperative CRT was selected according to several preoperative sequential treatment protocols developed at our institute between 2001 and 2012. This involved the TS-1 chemotherapy regimen, which includes tegafur, gimeracil, and oteracil potassium (80 mg/m²/day), and five fractions of radiotherapy (45 Gy at the rate of 1.8 Gy/day) every week. Our criteria for preoperative CRT was advanced rectal cancer pathologically diagnosed as adenocarcinoma and preoperatively diagnosed as T3/T4, N0-3 cancer. Primary tumor and nodal staging before and after CRT was performed using pelvic MRI and CT. Lymph nodes measuring 10 mm in diameter were considered to be metastases. If metastatic lateral pelvic lymph nodes could not be detected, lateral pelvic lymph node dissection was not performed. After surgery, the patients were examined at follow-up visits conducted every 3 months for the first 2 years and every 6 months thereafter.

At each follow-up visit, carcinoembryonic antigen and CA19-9 levels were determined. Thoracoabdominal and pelvic CT or abdominal ultrasonography was performed alternately every 3–6 months. Colonoscopy was performed annually.

We first divided the patients into two groups according to surgical procedure: the open group (n = 27) and the laparoscopic group (n = 38). Age and sex of the patients,

tumor location, tumor size, histological type, depth of tumor invasion, extent of lymphatic and vascular tumor invasion, number of positive lymph nodes, operative time, and amount of intraoperative blood loss were reviewed from the patients' surgical and pathological records. These clinicopathological characteristics and the short-term outcomes of LAR were compared between the open and laparoscopic groups. The pathological characteristics of patients in the open and laparoscopic groups were compared using the Fisher's exact test or Mann—Whitney *U*-test.

Next, we focused on the incidence of enterocolitis after surgery. Postoperative enterocolitis was defined using the Common Terminology Criteria for Adverse Events version 4.0. Because severe enterocolitis occurred only after laparoscopic LAR, patients were divided into two groups according to the absence (n = 32) or presence (n = 6) of this complication (grade 3 or higher). Similarly, the pathological characteristics of patients in these two groups were compared using the Fisher's exact test or Mann-Whitney U-test. The Wilcoxon rank test was used to compare median age, size of tumor, operative time, amount of intraoperative blood loss, and postoperative hospitalization duration among groups. Variables with P-values less than 0.05 in univariate analysis were included in odds ratios and corresponding 95% confidence intervals (CI). A P-value greater than 0.05 was considered statistically significant for all analyses.

All statistical analyses were performed using the SPSS 11.0 statistical software program for Windows (SPSS Inc., Chicago, USA). This study was conducted according to the Ethical Guidelines for Clinical Studies of Oita University Faculty of Medicine.

Results

In this study, all 65 patients with stage II/III rectal cancer underwent curative LAR. Univariate analysis revealed that the occupancy rate, tumor location, and depth of tumor invasion were significantly different between the open and laparoscopic LAR groups (P < 0.05) (Table 1). In addition, there were significant differences in the operative time, amount of intraoperative blood loss, and incidence of enterocolitis between the open and laparoscopic LAR groups (P < 0.05) (Table 2). Postoperative enterocolitis occurred in six patients (five men, one woman; median age, 74.5 years; interquartile range [IQR], 61.2-78.7 years; mean BMI, $26.3 \pm 8.09 \text{ kg/m}^2$) in the laparoscopic LAR group. The clinicopathological features and short-term outcomes of the six patients with postoperative enterocolitis are shown in Table 3. The median onset period of enterocolitis was 3 days after

Table 1 Clinicopathological features of patients who underwent low anterior resection for stage II/III rectal cancer

Mar William Co.	Open	Laparoscopy	
Patient demography	(n = 27)	(n = 38)	P-value
Sex (n)			0.918
Male	16 (59.3%)	23 (60.5%)	
Female	11 (40.7%)	15 (39.5%)	
Age (years)			0.370
Median	67	64,5	
Range	26-85	32-82	
BMI (kg/m²)			0,190
<28	23 (85.2%)	36 (94,7%)	
≥28	4 (14,8%)	2 (5.3%)	
Size of tumor (mm)	7.00		0:344
Median	55	45,5	
Range	30-120	20-90	
Circumferential occupying			
rate (n)			
<50%	1 (3,7%)	14 (36.8%)	0.002
≥50%	26 (96.3%)	24 (63.2%)	
Preoperative CRT (n)			
Performed	1 (3.7%)	5 (13,2%)	0,412
Not performed	26 (96.3%)	33 (86,8%)	
Location (n)			
Upper	22 (81.5%)	20 (52,6%)	0,017
Lower	5 (18.5%)	18 (47.4%)	
T (n)			
T3	16 (59,3%)	34 (89.5%)	< 0.01
T4	11 (40,7%)	4 (10.5%)	
N (n)			
NO	10 (37.0%)	19 (50,0%)	0.633
N1	11 (40.7%)	10 (26,3%)	
N2	5 (18.5%)	8 (21.1%)	
N3	1 (3.7%)	1 (2.6%)	
Stage (n)			
Stage II	10 (37.0%)	19 (50.0%)	0.544
Stage III A	10 (37.0%)	10 (26:3%)	
Stage III B	7 (26.0%)	9 (23,7%)	

CRT, chemoradiation therapy,

surgery, and all six patients developed grade 3 postoperative enterocolitis. The median operative time and amount of intra-operative blood loss of patients with postoperative enterocolitis were 405 min (IQR, 362.7–470.7 min) and 185 mL (IQR, 142.5–205.0 mL), respectively. The median tumor size was 44 cm (IQR, 39.0–61.7 cm) and the median length of hospitalization was 27 days (IQR, 23.5–71.0 days). The incidence of wound infection was 50% (3/6). Regarding clinical data such as fever, white blood cell count, and C-reactive protein (CRP), the median fever was 38.8°C (IQR, 38.3–39.2°C). The median white blood cell count was 7945/mm³ (IQR, 6572–9040/mm³) and the median C-reactive protein was 15.6 mg/L (IQR, 13.4–23.1 mg/L).

In the laparoscopic group, there were significant differences in BMI (\geq 28 kg/m²), operative time, postopera-

Table 2 Short-term outcomes of patients who underwent low anterior resection for stage II/III rectal cancer

Springermeering of the Benington Commission Continues	Open	Laparoscopy	
	(n = 27)	(n = 38)	P-value
Operative findings			
Operation			
Operative time (min)			
Median	265	352	0,01
Range	155-570	211-1340	
Intraoperative blood loss (mL)			
Median	360	155	0.015
Range	30-2800	5-2000	0.075
Intraoperative blood	30 2000	3 2000	
transfusion (n)			
Performed	6 (22,2%)	3 (7.9%)	0.099
Not performed	21 (77,8%)	35 (92.1%)	0.077
Anastomotic method (n)	21 (7.2,30%)	33 (72.170)	
Stapled	25 (92,6%)	33 (86.8%)	0,461
Hand-sewn	2 (7.4%)	5 (13,2%)	0,701
Short-term outcomes	2 (7.175)	5 (15,270)	
Postoperative course			
Length of hospitalization			
(day)			
Median	18	17	0,354
Range	11-58	9-92	
Operative complications	77		
(n)			
Present	6 (22,2%)	7 (18,4%)	
Leakage	0	2	0.22
Intra-abdominaí	1	4	0.31
abscess			
lleus	2	0	0,089
Wound Infection	3	5	0.80
Neurogenic bladder	4	1	0.07
Enterocolitis	0	6	0.03
Absent	21 (77,8%)	31 (81,6%)	
30-days mortality (n)			
Present	0 (0%)	0 (0%)	0.99
Absent	27 (100%)	38 (100%)	

CRT, chemoradiation therapy.

tive hospitalization, and incidence of wound infection between the absence of postoperative enterocolitis and presence of postoperative enterocolitis groups (P < 0.05) (Table 4). Regarding subanalysis of the laparoscopic LAR group, cases with an operative time of more than 330 min were associated with occurrence of postoperative enterocolitis ($P \le 0.05$).

Subsequent odds ratio analysis using factors significant in univariate analysis revealed that BMI (\geq 28 kg/m²), operative time, and incidence of wound infection were 0.111 (95%CI, 0.044–0.280, $P \leq$ 0.05), 1.40 (95%CI, 1.068–1.835, $P \leq$ 0.05), and 15.0 (95%CI, 1.752–128.310, $P \leq$ 0.05), respectively (Table 5).

Discussion

In this study, laparoscopic surgery for rectal cancer was associated with a less intraoperative blood loss than open surgery, and the operative time in the laparoscopic group was longer than in the open group. These results are consistent with those of other reports (15,16). The incidence of postoperative enterocolitis in the laparoscopic group was higher than in the open group. The occurrence of enterocolitis after laparoscopic LAR was associated with BMI (≥28 kg/m²), operative time, and wound infection. In this study, although only 15% (6/38) of patients who underwent laparoscopic LAR went on to develop enterocolitis, these patients developed severe enterocolitis of grade 3 or higher (Common Terminology Criteria for Adverse Events version 4.0). This suggests that clinical management for postoperative enterocolitis is necessary in patients who undergo laparoscopic LAR for advanced rectal cancer.

Recently, Yamamoto et al. reported that laparoscopic surgery can be used for safe resection of clinical stage 0/I rectal carcinoma (10). According to their report, the rate of postoperative enterocolitis was 0.25% (1/400). Evidence indicates that postoperative enterocolitis is a rare complication. For stage 0/I, which was excluded from this study, the rate of enterocolitis after open and laparoscopic LAR was 6.6% (1/15) and 2.9% (1/34), respectively (data not shown). There was no significant difference in the incidence of postoperative enterocolitis between the open and laparoscopic groups with stage 0/I rectal cancer. Interestingly, only patients who underwent laparoscopic LAR for advanced rectal cancer went on to develop enterocolitis in the present study. We therefore believe that the incidence of postoperative enterocolitis may be associated with laparoscopic procedures for patients with advanced rectal cancer.

Some studies have examined the surgical risk factors for enterocolitis. Evasovich et al. reported that CO2 pneumoperitoneum increased the incidence Escherichia coli bacterial translocation in a rat model (17). In clinical settings, there have been some reports of mesenteric ischemia, reduction of portal venous flow, and bowel infarction after laparoscopic surgery (18–22). During laparoscopic LAR for rectal cancer in the present study, patients were maintained in the Lloyd-Davies position. Therefore, we hypothesize that the intestine becomes congested by the decrease in portal venous flow subsequent to a rise in portal pressure and the intestine becomes susceptible to a mucosal membrane disorder. Furthermore, we hypothesize that enterocolitis is associated with prolonged pneumoperitoneum subsequent to prolonged operative time. As a result, subanalysis revealed that the cases with an operative time greater Table 3 Clinicopathological findings of patients with postoperative enterocolitis

Location

Lower

Upper

Lower

Lower

Lower

Lower

Other

complication

BMI

25,2

23.4

28.4

18.5

41.3

21.2

Wound

infection

Age

78

82

49

79

58

71

Intra-abdominal

abscess

Postoperative complication

(years)

Sex

M

M

M

M

Μ

Patient

2

3

5

Patient

2

3

5

Tumor

35

46

38

42

90

67

size (mm)

Gross

type

2

2

2

2

2

2

Bleeding

Clinical data

Surgical outcome

Operation

method

Lap sLAR

Lap HAR

Lap sLAR

Lap sLAR

Lap sLAR

Lap LAR

Peak of

37.8

38.3

39,4

39.1

38.4

39.2

tubular adenocarcinoma; Pap, papillary adenocarcinoma; POD, postoperative day; sLAR, super low anterior resection; V, venous invasion; WBC, white blood cell.

fever (°C)

Operative time

(min)

355

336

486

425

1340

386

Rebound

ove.

CD, clostridium difficile; CRP, C-reactive protein; F, female; HAR, high anterior resection; Lap, laparoscopic; LAR, low anterior resection; Ly, lymphatic invasion; M, male; Mod, moderately differentiated

tenderness

Histology

T stage

3

3

3

3

3

3

CRP (mg/L)

36,6

8.36

12.8

16.2

25.4

15.0

N stage

0

0

2

CD toxin

Histological type

Mod

Pap

Pap

Mod

Mod

Mod

(day)

23

25

29

92

14

85

Length of

hospitalization

Ly

Recurrence

Intraoperative

blood loss (mL)

100

210

130

190

2000

POD 3

7600

6230

9290

8290

4510

12810

WBC (/mm3)

180

119

Asian J Endosc Surg 7 (2014) 214-221 Asian J Endosc Surg 7 (2014) 214-221 © 2014 Japan Society for Endoscopic Surgery, Asia Endosurgery Task Force and Wiley Publishing Asia Pty Ltd

M Inomata et ol

Table 4 Clinicopathological features and short-term outcomes of patients after laparoscopic low anterior resection for stage II/III rectal cancer with/ without postoperative enterocolitis

	Enterocolitis		
	Absent (n = 32)	Present (n = 6)	P _r value
Patient demography			;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;;
Sex (n)			0.219
Male	18 (56:3%)	5 (83;3%)	
Female	14 (43.8%)	1 (16.7%)	
Age (years)			0,279
Median	64	74.5	
Range	32–82	49-82	
BMI (kg/m²)			0.021
<28	32 (100%)	4 (65.7%)	
≥28	0 (0%)	2 (33.3%)	
Size of tumor (mm)			0,384
Median	47,5	44	
Range	20–90	35–90	
Circumferential occupying rate (n)			0.401
<50%	27 (84.4%)	2 (33.3%)	
≥50%	5 (15.6%)	4 (66,7%)	
Preoperative CRT (n)			0,412
Performed	5 (15,6%)	0 (0%)	
Not performed	27 (84,4%)	6 (100%)	
Location (n)			0.069
Upper	19 (59,4%)	1 (16,7%)	
Lower	13 (40,6%)	5 (83,3%)	
T (n)			
T3	28 (87.5%)	6 (100%)	0.487
T4	4 (12.5%)	0 (0%)	
N (n)			
NO	17 (53.1%)	2 (33.3%)	0,241
N1	8 (25,0%)	2 (33,3%)	
N2	7 (21.9%)	1 (16.7%)	
N3	0 (0%)	1 (16.7%)	
Stage (n)			
Stage !!	17 (53.1%)	2 (33,3%)	0.816
Stage IIIA	10 (31,3%)	2 (33,3%)	
Stage IIIB	5 (15,6%)	2 (33,3%)	
Operative findings			
Operation			
Operative time (min)			0.020
Median	332.5	405,5	
Range	210–730	336-1340	
Intraoperative blood loss (mL)			0.571
Median	125	185	
Range	5–560	100–2000	
Intraoperative blood transfusion (n)			0.412
Performed	30 (93,8%)	1 (16,7%)	
Not performed	2 (6,3%)	5 (83 _{.3} %)	
Anastomotic method (n)			
Stapled	29 (90:6%)	4 (66.7%)	0.169
Hand-sewn	3 (9,4%)	2 (33.3%)	
Short-term outcomes			
Postoperative course			
Length of postoperative hospitalization (day)			0.005
Median	15,5	27	
Range	9 - 67	14-92	
Operative complication (n)			
Present	4 (12,5%)	3 (50,0%)	
Leakage	2	0	0,65
Intra-abdominal abscess	3	1	0.39
Ileus	0	0	0.75
Wound infection	2	3	0,003
Neurogenic bladder	0	0	0.75
Absent	28 (87:5%)	3 (50,0%)	

CRT, chemoradiation therapy,

Asian J Endosc Surg **7** (2014) 214–221 © 2014 Japan Society for Endoscopic Surgery, Asia Endosurgery Task Force and Wiley Publishing Asia Pty Ltd

Table 5 Odds ratio of incidence of enterocolitis after laparoscopic low anterior resection

dent () - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	Enterocolitis	A Company College Control of the Con		
	Absent (n = 32)	Present (n = 6)	Odds ratio (95%CI)	<i>P</i> -value
BMI (kg/m²)				0,021
<28	32 (100%)	4 (66.7%)	0.111 (0.044-0.280)	
≥28	O (0%)	2 (33,3%)		
Operative time (min)				0,020
Median	332,5	405.5	1.40 (1:068-1:835)	
Range	210-730	336-1340		
Wound infection (n)	2 (6.3%)	3 (50,0%)	15,0 (1.752-128,310)	0.003

CI. confidence interval.

than 330 min were associated with the occurrence of postoperative enterocolitis ($P \le 0.05$).

There may be several factors underlying the development of enterocolitis. Although enterocolitis is related to antibiotic-associated diarrhea or radiation, no significant differences were noted them between the open and laparoscopic groups in this study. Therefore, we investigated the possibility that postoperative enterocolitis developed because of a mucosal membrane disorder or mesenteric ischemia following prolonged pneumoperitoneum. It is known that 60%-70% of immune cells that control systemic immunity exist in the intestine and not in the lymph nodes and spleen (23-25). The gut-associated lymphoid tissue comprises immune cells in Peyer's patches in the intestine, and this tissue controls intestinal immunity (26-28). Because of mesenteric hypoxia and related gut ischemia-reperfusion injury that occurs during and after pneumoperitoneum, the intestine can become extremely susceptible to a mucosal membrane disorder, which is a risk factor for postoperative bacterial translocation. In such a setting, severe enterocolitis may be caused by either the excessive immune response or failure of the body's protection system. It makes sense that there was a significant difference in the incidence of wound infection between the absence of postoperative enterocolitis and presence of postoperative enterocolitis groups.

We generally perform laparoscopic LAR with pneumoperitoneum at 10 mmHg because pneumoperitoneum at 12–15 mmHg increases the intra-abdominal pressure above the normal portal circulation pressure (29). It has been reported that pneumoperitoneum pressure at 10–15 mmHg significantly decreased blood flow in the stomach by 40%, jejunum by 32%, liver by 39%, and colon by 44% (30). Because this study is a retrospective study, blood flow in the splanchnic vessels could not be measured. Therefore, it is necessary to examine the relationship between blood flow in the splanchnic vessels and the incidence of postoperative enterocolitis in the future.

It has been reported that the Lloyd-Davies position constitutes a risk factor for acute lower limb compartment syndrome, but the incidence of lower limb and abdominal compartment syndrome following laparoscopic colorectal surgery remains unknown (31). In contrast, the same report suggested that decreased venous return with pooling in the mesentery resulted from increased intra-abdominal pressure during laparoscopic surgery in the Lloyd-Davies position (31). Now, based on the results of this study, we try to return patients to the flat position from the Lloyd-Davies position and degas the abdomen every 2 h. Since we initiated these measures, we have not experienced a single case of postoperative enterocolitis. In the future, to elucidate the mechanisms by which postoperative enterocolitis occurs, operative time, position, and monitoring of relative perfusion will be needed. However, the number of cases of severe postoperative enterocolitis is small within a single institution, and multivariate analysis may not be available for such a study. For this reason, it will be necessary to examine severe enterocolitis after laparoscopic surgery in a multicenter study.

In conclusion, we demonstrated that the incidence of postoperative enterocolitis was higher after laparoscopic surgery than after open surgery for stage II/III rectal cancer. Clinical management in the perioperative period of laparoscopic LAR is necessary to prevent postoperative enterocolitis in obese patients and those with a prolonged operative time.

Acknowledgments

The authors have no conflicts of interest or financial ties to disclose.

References

 The Japan Society for Endoscopic Surgery. 11th nationwide survey of endoscopic surgery in Japan. 2012.

- Guillou PJ, Quirke P, Thorpe H et al. Short-term endpoints
 of conventional versus laparoscopic-assisted surgery in
 patients with colorectal cancer (MRC CLASICC trial):
 Multicentre, randomised controlled trial. Lancet 2005; 365:
 1718–1726.
- Veldkamp R, Kuhry E, Hop WC et al. Laparoscopic surgery versus open surgery for colon cancer: Short-term outcomes of a randomised trial. Lancet Oncol 2005; 6: 477–484.
- Jayne DG, Guillou PJ, Thorpe H et al. Randomized trial of laparoscopic-assisted resection of colorectal carcinoma: 3-year results of the UK MRC CLASICG Trial Group. J Clin Oncol 2007; 25: 3061–3068.
- Hewett PJ, Allardyce RA, Bagshaw PF et al. Short-term outcomes of the Australasian randomized clinical study comparing laparoscopic and conventional open surgical treatments for colon cancer: The ALCCaS trial. Ann Surg 2008; 248: 728-738.
- 6. Lujan J, Valero G, Hernandez Q *et al.* Randomized clinical trial comparing laparoscopic and open surgery in patients with rectal cancer. *Br J Surg* 2009; **96**: 982–989.
- Peliciotti F, Guerrieri M, Paganini AM et al. Long-term results of laparoscopic versus open resections for rectal cancer for 124 unselected patients. Surg Endosc 2003; 17: 1530–1535.
- Law WL, Lee YM, Choi HK et al. Laparoscopic and open anterior resection for upper and mid rectal cancer: An evaluation of outcomes. Dis Colon Rectum 2006; 49: 1108– 1115.
- McKay GD, Morgan MJ, Wong SK et al. Improved shortterm outcomes of laparoscopic versus open resection for colon and rectal cancer in an area health service: A multicenter study. Dis Colon Rectum 2012; 55: 42-50.
- Yamamoto S, Ito M, Okuda J et al. Laparoscopic surgery for stage 0/I rectal carcinoma: Short-term outcomes of a singlearm phase II trial. Ann Surg 2013; 258: 283–288.
- 11. Etoh T, Shiraishi N, Tajima M *et al.* Transient liver dysfunction after laparoscopic gastrectomy for gastric cancer patients. *World J Surg* 2007; 31: 1115–1120.
- Sammour T, Mittal A, Loveday BP et al. Systematic review of oxidative stress associated with pneumoperitoneum. Br J Surg 2009; 96: 836–850.
- Gianotti L, Nespoli L, Rocchetti S et al. Gut oxygenation and oxidative damage during and after laparoscopic and open left-sided colon resection: A prospective, randomized, controlled clinical trial. Surg Endosc 2011; 25: 1835–1843.
- 14. Mangram AJ, Horan TG, Pearson ML et al. Guideline for Prevention of Surgical Site Infection, 1999. Centers for Disease Control and Prevention (CDC) Hospital Infection Control Practices Advisory Committee. Am J Infect Control 1999; 27: 97–132, quiz 3-4; discussion 96.
- Kang SB, Park JW, Jeong SY et al. Open versus laparoscopic surgery for mid or low rectal cancer after neoadjuvant

- chemoradiotherapy (COREAN trial): Short-term outcomes of an open-label randomised controlled trial. *Lancet Oncol* 2010; 11: 637–645.
- Aziz O, Constantinides V, Tekkis PP et al. Laparoscopic versus open surgery for rectal cancer: A meta-analysis. Ann Surg Oncol 2006; 13: 413–424.
- 17. Evasovich MR, Clark TC, Horattas MC *et al.* Does pneumoperitoneum during laparoscopy increase bacterial translocation? *Surg Endosc* 1996; **10**: 1176–1179.
- Bandyopadhyay D & Kapadia CR. Large bowel ischemia following laparoscopic inguinal hernioplasty. Surg Endosc 2003; 17: 520–521.
- Paul A, Troidl H, Peters S et al. Fatal intestinal ischaemia following laparoscopic cholecystectomy. Br J Surg 1994; 81: 1207
- 20. Dwerryhouse SJ, Melsom DS, Burton PA *et al*. Acute intestinal ischaemia after laparoscopic cholecystectomy. *Br J Surg* 1995; **82**: 1413.
- 21. Jakimowicz J, Stultiens G, Smulders F. Laparoscopic insufflation of the abdomen reduces portal venous flow. *Surg Endosc* 1998; **12**: 129–132.
- 22. Takagi S. Hepatic and portal vein blood flow during carbon dioxide pneumoperitoneum for laparoscopic hepatectomy. *Surg Endosc* 1998; **12**: 427–431.
- Hooper LV, Littman DR, Macpherson AJ. Interactions between the microbiota and the immune system. Science 2012; 336: 1268-1273.
- 24. Lee YK & Mazmanian SK. Has the microbiota played a critical role in the evolution of the adaptive immune system? *Science* 2010; **330**: 1768–1773.
- Littman DR & Pamer HG. Role of the commensal microbiota in normal and pathogenic host immune responses. Cell Host Microbe 2011; 10: 311–323.
- Barr WG, Challacombe SJ, Yem A et al. The accessory cell function of murine Peyer's patches. Cell Immunol 1985; 92: 41–52.
- Salminen S, Bouley C, Boutron-Ruault MC et al. Functional food science and gastrointestinal physiology and function. Br J Nutr 1998; 80: S147–S171.
- Barone F, Vossenkamper A, Boursier L et al. IgA-producing plasma cells originate from germinal centers that are induced by B-cell receptor engagement in humans. Gastroenterology 2011; 140: 947–956.
- Hulka J & Reich H. Textbook of laparoscopy, 3rd edn. Philadelphia, PA: WB Saunders, 1998.
- Schilling MK, Redaelli C, Krahenbuhl L et al. Splanchnic microcirculatory changes during CO₂ laparoscopy. J Am Coll Surg 1997; 184: 378–382.
- 31. Rao MM & Jayne D. Lower limb compartment syndrome following laparoscopic colorectal surgery: A review. *Colorectal Dis* 2011; **13**: 494-499.



場集最新の消化器癌術前術後化学療法

金光 幸秀* 志田 俊輔" 塚本

Yukihide Kanemitsu Dai Shida Shunsuke Tsukamoto

●要旨●大腸癌の標準治療は外科的切除であり、この治療戦略をより有効にするために、術前 あるいは術後に化学療法を併用することによって治療効果の強化が試みられている。Stage II 結腸癌の場合、現在欧米では、術後補助化学療法として oxaliplatin 併用レジメンが推奨され ているが、国内外では、そのベースとなる手術成績や病理診断法に大きな隔たりがあるため、 欧米の標準治療をそのまま本邦へ外挿することには慎重になる必要がある。切除可能肝転移の 場合、補助化学療法の至適投与法は確立しておらず、肝切除周術期の補助化学療法を正当化す るエピデンスは依然としてないのが現状である。進行直腸癌の場合、欧米の標準的補助療法で ある術前化学放射線療法でなくても、術前化学療法により良好な成績が得られる可能性が北米 から報告され始めている。

● key words:大腸癌,術前補助化学療法,術後補助化学療法

はじめに

世界各国の大腸癌患者生存率を比較したデータか ら、本邦の成績はトップレベルであり、その主な要因 は、Stage に応じた系統的リンパ節郭清と、精度の高 い病理診断に加えて、大腸癌研究会によって『大腸癌 取扱い規約』が提示され、根治性を重視する一貫した 姿勢が保たれてきたことも背景の1つと思われる。 一 方、欧米では、2004年に oxaliplatin+5-FU+LV 併 用療法の有用性が示された以降は、結腸癌術後補助化 学療法として oxaliplatin 併用レジメンが推奨されて いるが、本邦と欧米の大腸癌の5年生存率には約10% の差があり、欧米の標準治療を本邦の実地臨床にその まま利用することには慎重さが求められる。

本稿では、現状における大腸癌に対する術前術後補 助化学療法について、最新の知見に基づきながら解説 する。

国立がん研究センター中央病院大腸外科

結腸癌に対する術後補助化学療法

1. 欧米

近年の大腸癌(結腸癌)に対する術後補助療法の臨 床試験は主に欧米を中心に積極的に行われ、1980年 代後半以降,5-FU/levamisole 療法¹¹や5-FU/LV 療 法³において、術後補助薬物療法の手術単独群に対す る有用性が示された。

1) NSABP C-06試験

その後、NSABP C-06においては、Stage II/II (47%/53%) の結腸癌を対象として bolus 5-FU/LV 療法 (Roswell Park Memorial Institute; RPMI regimen) と UFT/LV 療法とのランダム化比較試験 として行われ、無病生存期間(disease free survival; DFS), 全生存期間 (overall survival; OS) が 同等であることが示された³⁾。

2) X-ACT 試験

Stage 皿の結腸癌を対象に capecitabine 療法と bolus 5-FU/low dose LV (Mayo regimen) 療法と比 較した X-ACT 試験において, capecitabine は 5-FU/LV と同等の効果であることが示された⁴⁾。ま た、5-FU/LV の投与方法として、bolus 5-FUを主

清化器外科, 37:435~445, 2014